

IKGの旅館経営再生塾

第211回 金融危機のなか、どう進んでいくか

榎飯島 綜研 代表取締役社長 孫田 猛

突然のリーマンショックに続き、世界同時株安、強靱だと思われていた企業のあつけない破綻等、ここにきて深刻な経済状況に陥っている。

大手金融機関内部では、自らの体制を維持することに最大のエネルギーを積み込んでおり、人のことなどかまわていられるような状況ではないようだ。

この影響は地銀や信金等にも波及するものと思われる。

したがって後ろ向きの新規貸付はありえず、古くからの取引がある金融機関でも貸し渋りが起こり、貸し剥がしも大いに予想される。

今後、民間の金融機関は健全な企業にしか融資しない(できない)というスタンスが見え始めている。

実際、融資先が旅館や建設業者と聞いただけで、最初から引いてしまう銀行もあるし、ある地域で事故扱いになった旅館があれば、もうその地域の旅館には融資の対象とはしないという方針をたてているところもあるようだ。

今回の金融危機は、貸す側の環境が劇的に変わったことが大きく取りざたされており、そのあおりを企業が受けるという構図である。

しかし、それとは別に、いくら運転資金をつぎ込んでも、なんら企業体質が変わらず脆弱なままの企業に対しては、金融機関も早急に手を引いてくる。

旅館はこここのところの認識がとても重要である。自助努力で持ち直しができた旅館には、

支援の道が開ける可能性があるが、そうではない旅館は最終的に整理の道に向かうのである。

我が旅館が財務的に健康体であるかどうか？もしそうでなければ、健康体である財務状況と現況とのギャップを客観的に認識し、正常化へのプロセスを明確にし、確実に実践していくしかない。

「再生計画」を数多く見る機会があるが、計算どおりに進んでいないところが非常に多い。それは一時的なリスクにより、返済を猶予しても、日々のオペレーションや提供商品、営業体制になんら変わりがなく、旧態依然とした経営を繰り返しているだけだからである。

だめだったことを繰り返さない。我が旅館のメインターゲットに対し、抜群の商品を提供する。こんな気概で旅館経営をしていく覚悟が必要だ。もはや旅館だけは特別だという時代は戻ってこない。

<http://ik-g.jp>

magota@ik-g.jp